

Title	歓待と調和：シャルル・フーリエの恋愛観
Sub Title	L'hospitalité et l'harmonie : La vision de l'amour chez Charles Fourier
Author	篠原, 洋治(Shinohara, Hiroharu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.80, (2001. 6) ,p.318(51)- 334(35)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00800001-0334

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歓待と調和

——シャルル・フーリエの恋愛観——

篠原 洋治

婚姻と道徳

婚姻が法的な制度であることはいうまでもないが、男性中心主義の社会において、それは女性の身体の「排他的な」独占を意味する。つまり男女間の関係は「所有」という概念で捉えられる。他者を手段ではなく目的として扱わなければならないとしたカントは、婚姻を、異性「人格」間における性的能力の「相互所有」と考えた⁽¹⁾。『法哲学』の著者にとっては、婚姻はより積極的な意味をもった。「婚姻は本質的に一夫一婦制 Monogamie である。なぜなら婚姻関係に身をおき、身を委ねるのは人格性という直接的な排他的個別性であるからであり、従って婚姻関係の真実のあり方、真心からのつながりは、ひとえにこの人格性の一心同体となった相互献身からのみ生じるのである」⁽²⁾。婚姻による家族は、道徳意識の実体的環境であり、婚姻に伴う義務を果たすことを媒介に、あらゆる社会的義務を果たす道徳的・法的主体を作り出す装置である。それは同時に「自己陶冶」としての労働をする主体を形成し、市民社会へと送り出す装置でもある。単婚家族 monogamie を擁護する根強いイデオロギーがこうして確立される。

単婚家族を「自然の声」に従う制度と位置づけ、その「凡庸な幸福」を賛美する道徳哲学に、フーリエは真っ向から対決する。彼は「絶対的懐疑と絶対的孤絶」という方法を採用しながら、「自然の声」をむしろ人間の情念のなかに聴きとろうとした。「自然の意志を発見するためには、あるべ

きこと、つまり義務に属するものを忘れ、あるがままのことを分析することにしよう。」と (I, 73. 上131)。そして1808年、物質界の万有引力の法則に匹敵する「情念引力 l'attraction passionnée」の理論を発見したと宣言し、この理論にもとづきながら、あらゆる情念を解放する「ファランジュ phalange」を建設することを提唱する⁽³⁾。1620人の老若男女からなるこの産業共同体が、地球全体へ伝播することによって、人類は、不幸な時代である「文明」から幸福な時代「調和」へと飛躍することができる。「調和」においては、道徳に基礎づけられた「義務」は消滅し、引力に誘われた人々の自発的な活動が支配的になる。労働は「義務」として押しつけられるのではなく、「引力の計算」によって「快樂」となる⁽⁴⁾。また人々は単婚家族から解放され、恋愛の自由を謳歌することになるだろう。

文明と姦通

18世紀後半、タヒチの習俗の「発見」は、ディドロをはじめ多くの自由思想家の想像力をかき立てた。ルネ・シュレールに従えば、レチフ・ドラ・ブルトンヌの『南半球発見』(1781年)は、結婚をめぐる自由思想の一つの限界を示している。結婚を「人生の最良の選択」と考えるレチフは、「つねにカップルや結婚を侵害しないで、……ある種の緩やかな多婚制を主張する」ことによって、結婚制度を擁護しようとした⁽⁵⁾。これに対してフーリエは、結婚のなかに偽善と退屈さしか見い出さない。「結婚の祝宴が理にかなっているのは、男が大金持ちの女と結婚する場合だけ」であり、婚礼とは「一ヶ月もすれば互いに耐えられなくなるであろう二人を、一生、鎖につないでやる」ものにほかならない (I, 174. 上286)。男にとって家庭ほど陰鬱で息の詰まる場所はない。そこにあるのは、道徳家たちが賛美する「単調な喜び」だけである。それゆえ「夫たちは、自分の仕事にともなう気晴らしがあるにもかかわらず、群をなして女郎屋やカフェ、社交場、芝居などに通っている。諺がいうごとく、いつも同じ皿で食うことにあきあきして、その不満を癒そうとするのだ」(I, 111. 上188-189)。フーリエによれば、この倦怠こそ、情念と調和の最大の敵なのであ

る。

「姦通はわれわれの法に従えば社会的ペストである」(XII, 504)。しかし「文明」はこの疫病から逃れられない。「文明は妻たちの貞操とは両立不可能である」(XII, 338)。なぜなら妻に貞節を要求する男たち自身が、「移り気 papillonne」情念を解放するべく、間男になろうと絶えずチャンスを窺っているからである。「あのジャン＝ジャック・ルソーは、女たちを世帯に閉じこめよと説き立てている。そのくせ浮かれ女や良家の子女の熱烈な愛好者であることを自ら認め、自分に優しくしてくれた女たちの姿形を不謹慎なほど細々と書きつづっているのだ。もしも世の婦人がすべて彼の教えにしたがって夫のためだけに生きてとすれば、彼自身どうしてそんな慰みごとに浴することができただろうか」(I, 130. 上217)。「文明におけるわれわれの習慣や世論の滑稽さときたら、どれもこれも似たり寄ったりのものだ」(I, 142. 上236)。

この滑稽さを笑いとばすかのように、フーリエは「寝取られ夫 cocu」を80通りにも分類し、ユーモアたっぷりにコメントを加えている(XI, vol. III, 254-272)。たとえば46番目のコキュを見てみよう。「絶望した、角をはやしたコキュ。これは考えられるあらゆる苦渋を舐めたモリエールのジョルジュ・ダンダンである。妻に騙され、破産させられ、酷い扱いをうけ辱められた彼は、結婚が、現世で煉獄の苦しみを受けながら天国に直行する方法であると気づくのだ」(XI, vol. III, 263)。この滑稽なやきもち焼きは物笑いの種になるが、彼を笑う者もまちがいがなくコキュのタブローのどこかに分類される運命にある。この嫉妬心は、妻の所有という観念から派生したものであり、エゴイズムにはかならない。ディドロが『ブーガンヴィル航海記補遺』で描いた、旅人を歓待するために妻や娘を差し出すタヒチの風習は、この文明の排他的なシステムから生じる嫉妬心の滑稽さを示しているではないか(VII, 82)。

「妻たちに貞節を求めることは、文明に終焉を要求することである。というのも文明は、貞節を勝ち得るための次の二つの方法のいずれももたないからだ。すなわち、拘束によるもの(隠遁、老婆の監視、去勢、野蛮な

状態を構成するその他の慣習)と、第六期、文明からの出口を構成する愛における保証による方法である」(XII, 338)。もちろん第二の解決策を選ばねばならない。フーリエはつねに、「文明」において悪徳と思われているもののなかにこそ、その迷宮からの出口があると考える。「私は姦通すなわち間男の風習が、愛における直接的で社会的な飛躍の胚珠であることを示した。……われわれの慣習では男たち間の不和と女性に対する軽蔑の種となるこの共有を、友情の絆にかえる計算を発見しさえすればよいのだ」(VII, 52)。ここにはフーリエのユートピアの特徴が鮮明に現れている。ドゥルーズが強調するように、潜在的なものと可能的なものは根本的に異なる⁶⁾。ユートピアは不可能なものを可能にするのではなく、潜在的なものを現実化するものである。フーリエは、ラ・フォンテーヌを引用し、「不可能主義者」である哲学者を次のように批判した。「……何ひとつろくなことができず、どこへ行っても噛みついてばかりいる、この最低の精神」と(I, 182. 上295)。為すべきことは、「文明」のなかで姦通という形であらわれている「隠された多婚」を、来るべき時代の「萌芽」とみなしながら、それを現実化することである。

女性の快樂

滑稽な男たちに比べ、より不幸なのは家庭に縛り付けられた妻や若い娘たちである。彼女らを隷属状態から解放しなければならない。その際、「羅針盤」になるのは「女性の快樂」である。「男も女も自らの快樂のために作られている」(I, 148. 上246)うえに、「男の幸福は女性の自由に比例するからだ」(I, 138. 上231)。ところが哲学者たちは、女性の「快樂への愛」を阻止することだけに熱中し、女性を道徳と教育によって「その性格たるや得体の知れない謎であるあの哲学的自動人形」(I, 137. 上228)に仕立て上げている。しかし「自然をいくら追い払っても、それは必ず駆け戻ってくる」(I, 137. 上229)。情念を抑圧しても無駄であるばかりか、不幸な結果を生むだけであるから、むしろ女性に恋愛の自由を認めるべきである。「恋愛の自由はわれわれの悪徳と称するものをほとんど美徳に転化さ

せ、またわれわれの親切と称するものをほとんど悪徳に転化させる」(I, 125. 上210)。女性の解放は「情念運動」を変化させ、来るべき時代へとわれわれを導くだろう。

「文明」の「思春期をむかえた子供たちは、家庭の退屈さから逃れることだけを考える。若い娘は舞踏会の夜を待ちわびるばかりだ」(X, vol. I, 64)。こうした「自然な」情念を解放するべく、「調和」に至る過渡期の時代においては、18歳を迎えた女性は「恋愛成年」として扱われる。ただしフリーエは無秩序な性の解放を唱えたのではなく、規則に従った解放が必要だと考えた。「色恋について美德と悪徳とに段階を認めさえすれば、真実にも快樂にも忠実で有益な風俗の誕生を見るであろう」(I, 140. 上233-234)。

18歳を過ぎた「門出組」の女たちは、三つの「恋愛団体」に配属される。すなわち、一生涯、一人の男だけを愛する「妻」、パートナーをかえることはできるが、一度には一人の男とだけ関係をもつ「姫君」、そして規則に縛られない「艶女」である。もっとも、「妻になれば姫君及び艶女の団体から監視されるはずなので、女は必ず忠実を守れると思うほどの愛情がなければ結婚しようとしなないだろう。その結果、人はずっとおそく、情念の静まる年頃にならなければ結婚しなくなり、結婚は老後の支えという本来の目的に戻されるだろう」(I, 141. 上235)。もちろん選択権はすべて女性にある。「恋愛団体」への女性の分類は、関係の透明性を保証することによって、欺瞞的な道徳から若い女性を救い出す。「哲学者たちの偽善的な教育方式は、娘たちが恋愛に対して無関心を装うべきことを説いているが、彼らはこれをもって実は万人が間男になる状態を実現し得たにすぎない」(I, 135. 上225-226)。そのうえで妊娠や墮胎の罪を若い娘に押しつけるのだから。

恋愛と産業

ところでこうした恋愛制度は、ファランジュの産業と切り離すことはできないものである。そもそもファランジュ建設の目的は、単婚家族に閉じ

こめられた人々を解放し、産業のなかで結びつけることにあった。家族に取って代わる集団は「系列 série」と呼ばれる。系列は、「年齢、財産、性格、知性など、あらゆる点で不揃いな人々からなり」(I, 293. 下173)、労働、娯楽、恋愛といった、生活のすべての領域において組織される。系列は固定的な集団ではなく、人々は活動内容に従って次々に系列間を移動していく。この往き来のなかで、人間関係はより密なものになる。たとえば、熟練の職人である老人と才能に溢れた子供を結びつける「産業的養子制度」や、階級、年齢を超えて男女を結びつける「間接的家事労働」の系列が、「もっとも小さな結合」としての単婚家族に代わる「家族状態」を生み出すのである⁽⁷⁾。フーリエは単婚家族を徹底して批判したが、逆説的にも、産業という社会領野で「家族愛 famillisme」が別な形で発展していくことを望んだ。

「家族愛」がファランジュ内の絆を強くするのに対し、「愛 amour」という情念は、ファランジュの枠を越えて広がっていく。「恋愛は文明において無秩序と怠惰と浪費の原因であるが、結合秩序においては利益と産業的奇跡の源となる」(I, 172. 上284)。この奇跡の一例が、「産業軍」の活動である。産業軍は、「美しさや学問的成功、ないし労働における献身」にもとづいて各ファランジュで選ばれた「純潔男女」を召集し、たとえばサハラ大砂漠の征服を企てる。そして実際に、「土を持ち込み、草木を植え、着々と植林した結果、ついにこの地方を潤し、流砂をくい止め、砂漠をして豊穡の地域に一変せしめる」(I, 176-177. 上289)といった大事業をやったのけるのだ。彼らをそんな仕事に熱中させるのは、日々の労働の後に開かれる饗宴の楽しみである。「それは素晴らしい集まりであり、純潔男女はそこで初めての恋愛を経験する」(I, 173. 上285)。純潔女たちは、求愛者たちが、公開遊戯や軍の労働における功績を誇示するのを見守るが、もし彼らのうち一人を気に入れば、「高等斡旋婦人官」にその旨をそっと伝える。ここでも選択権は女性にある。軍隊には「毎夜ひそかに交わりをなそうとする男女を迎えるために必要な施設が整っている。……交わりは翌日にならなければ口外されない」(I, 175. 上287)。翌日、彼女は恋人とと

もに「姫君」の衣装で現れ、皆に祝福される。こうしたカップルは相当数に及ぶが、なかには恋が成就しない者もいる。「遊蕩男女は、朝ごとに負傷者をひきとりにいく任務をもっている。負傷者とは、夜の密会の結果ふられた求婚者の男女ことである」(I, 175. 上287)。「博愛の精神」をもったこの「遊蕩男女」の役割は重要である。ファランジュでは、だれもが「労働への権利」という「ミニマム」を保証されるが、恋愛においても同様に「ミニマム」が保証されるのである。

彷徨と歓待

産業軍の活躍が示すように、ファランジュは外に対して開かれたコスモポリットな都市である。世界の「普遍的調和」は、人々の往き来のうえに成立する。そこでは「遍歴騎士団」, 「冒険団」といった彷徨する「団bande」が、とりわけ重要な役割を果たす。遍歴騎士団について見よう。

ペルシャの薔薇団が突然やって来る。それは、劇や叙情的な芸に秀でたペルシャの男女三百人からなる遍歴の騎士たちの一行である。彼らはサン・クルーのファランジュを滞在地に決めた。彼らは早速、演劇や音楽を愛好する金持ちからなる定住騎士団に迎えられる。饗宴が始まる。遍歴の騎士たちは、十八番の歌や芝居やオペラを披露する。その間に、メキシコの紫陽花団が到着し、劇団同士の競演が、サン・クルー、ヌイイ、マルリーその他のファランジュ劇場で開催される。どのファランジュも、競って騎士たちをもてなす栄光にあずかろうとする。このように遍歴騎士団は、どこへ行っても定住騎士団に無条件で歓待され、愉快的な生活を送り、全人類から金をまきあげながらも、いささかもお金を使うことはない (I, 157-158. 上261-263)。

歓待すること。それはファランジュの掟のアルファにしてオメガである。遠方よりきたる異邦人を迎え入れることによって、ファランジュは倦怠を免れることができるからだ。退屈さこそ「文明」の特徴であり、情念と調和の敵ではなかったか。つねに異質なものを受け入れることによって、情念運動は多様な快楽を生み出すことができるのである。

ところで近代のコスモポリティズムは、いうまでもなくのカントの歓待の表現である。シェレーは、『永久平和のために』を引用しながら、カントの「普遍的歓待」を次のように説明している。「法的にいて、地球はすべての人々に属しているし、移動と『訪問』の権利は無条件である。かくして歓待は、この場所への帰属の共通の権利—あるいは観点を換えれば、場所への帰属に無関心でいられる権利—の帰結、その主観的な局面である。『地球は丸い、それはすべての人のものであり、彼はどの地点にしようとも、自分の家にいるのである』⁽⁸⁾。しかし、テリダが強調したように、近代における歓待にはパラドックスが伴う⁽⁹⁾。無条件で絶対的な定言命法としての歓待を実践しようとするれば、それは具体的な法律に依拠する制限されたものにならざるを得ない。つまり異邦人を法的に同定するとどまらず、「寄生者」として捉えることに行き着いてしまうのである。ここに近代国家が与える法的歓待の限界があらわれている。

「文明」の制限された歓待に対して、ファランジュのそれは、「普遍的歓待」のユートピックな可能性を示している。突然現れる旅人を歓待するために、ファランジュの住民は何でも投げ出さねばならない。必要なら身を委ねることもよしとする。他方、旅人も同様に、才能や美しさなどをすべてを惜しみなく披露することが要求される。それは身体をも含めた「贈与交換」(モース)である。そこには「hôte 主人=客人」の概念のもつ両義性、つまり歓待する者と歓待される者の立場の交換可能性があらわれている⁽¹⁰⁾。ファランジュの歓待の掟はいわゆる法律ではなく、「情念の結集」を実現するための祝祭のルールなのである。

歓待の掟

ここで草稿『愛の新世界』(1967年公刊)において、唯一戯曲形式で書かれた「聖なるヒロインの贖罪」の寓話を見ていくことにしよう。そこでは性的な歓待のテーマが展開されている。「恋愛戦争」とは、調和人がこぞって参加する娯楽であり、陣地戦による恋の鞘当てゲームである。

恋愛戦争のさなか、遍歴の騎士団に属し旅を続ける美しき大女ファクマ

は、グニッドのファランジュの恋愛軍隊に捕らえられる。捕虜となったファクマは公開の集会で住民たちに身を委ね、罪を贖わなければならない。ところがタルタリーの族長と情熱的で官能的な恋の日々を過ごしたばかりの彼女は、グニッドでは心の安らぎが欲しいと主張する。官能的なもの、物質的なものをいっさい含まない純粋な感傷的な愛、セラドニー *céladonie* を要求する。ファクマは求愛者たちに次のように言う。「みなさん、今日は官能的な精神をすべて忘れて欲しいのです。そしてセラドニーに浸り、浄化された炎に燃えて欲しいのです」(VII, 179)。

これに対して求愛者たちは、ファクマの滞在の短さを理由に、物質的な満足を要求する。幾度かの押し問答のあげく、ファクマはある譲歩を示す。「もし8人の志願者のうちで1人が、私が課した条件、すなわち、私と純粋に感傷的な感情、その誠意を私が十分に認めるほど熱心なセラドニーを紡ぐと約束してくれるなら、私は埋め合わせとして7人のうち運命が決める2人に愛の証を授けましょう」(VII, 182)。この提案はますます混乱を引き起こさずにはいない。求愛者のそれぞれが、他人の物質的な満足のために犠牲になるというこの名誉ある大役を、互いになすりつけようとするのである。さらにファクマは、「もしあなた方のうち1人が私の願いに従ってくれるなら、捕虜生活の後に、他の7人に寵愛を与えましょう。」(VII, 184)と譲歩するが、求愛者たちは同じ要求を繰り返すばかりである。これに憤慨したファクマは、全員を物質的な欲望に従属したエゴイストであると非難し、一切の交渉を拒絶する。そのとき求愛者の一人、クリテュスが気を失ってしまう。これに罪悪感を感じたファクマは、彼を受け入れることにすると宣言する。その時、それまでファクマを懐柔することに専念してきた代弁者アリストファネスは、自分が官能的満足を得られないことについて怒りをあらわにし、ファクマは「奇妙な幻想のために7人を犠牲し、しかもその幻想にもっともふさわしくない者を選ぶことによって、統一法を踏みにじったのだ。」(VII, 187-188)と告発する。「ヒロインは、だれもが余りにもたやすく彼女に抱くであろう愛情を掻き立て、誠実な求愛者を夢中にさせ、しかる後に達成不可能な条件によって彼らを欲

求不満にしたうえで、寵愛の対象から排除するという脅迫によって苦しめるといふ戯れをしたのだ。」と (VII, 190)。

これに同意した尊者ヘロドトスは、「ファクマは、基軸的罪、つまり統一法の侵害を犯した。」と宣告した。そして刑務官イノは「基軸的罪は7倍の償いを課します。7かける8を計算してみてください。つまり54人(原文のまま)のグニッドの男女を満足させなければなりません。」(VII, 191)と説明を加える。ファクマはこれに衝撃を受けたが、依然として無実を主張した。そこに若く美しい熾天使イゾームが登場し、この紛争に終止符を打つべくセラドンの役を自ら買ってでる。「ファクマ、あなたは愛以上のものを私に喚起させます。私の情念の炎は、他の者たちがあなたから得るであろう幸福とは無関係です。私はあなたと、永遠なる熱狂的關係を結びたいのです。最も厳しい誓いをお命じください。たとえそれがあなたを所有することからの絶対的排除、多くの他者の幸福を見ながらその熱狂を倍増する義務、あなたの快樂を分かち合うことを要求することなく、それを自分のものとして享受する義務、等々であろうと。私はあなたの目に特別な者として映るように、私から何かを奪って欲しいのです」(VII, 195)。

このイゾームの登場は事態をまったく逆転させる。ファクマは次のように言う。「さて、グニッドの皆さん、私が無償の愛の、情熱の炎を求めたのは間違いだったでしょうか。8人の有罪者に対して、私の仇を討ってくれる愛の殉教者がここにいます。彼は、官能的な男たちが一瞬たりとも耐えられなかった権利剥奪を、一生の間、自らに課するというのです」(VII, 195)。……「イゾームは、あなた方の目の前で私を正当化してくれました。私が強い魂にとって不可能なことを要求していないこと、私が、気まぐれのなかでさえ徳と正義とから逸脱していないことを証明してくれました」(VII, 196)。それでもやはり約束は果たしましょう、とファクマは鷹揚さを見せた。

グニッドの人々は聖女への侮辱を詫び、ヘロドトスは新たに判決を下す。ファクマの要求はけっして間違っていなかったとし、逆に求愛者たち

の方が、「グニッドを支配している徳にふさわしくない、単純で官能的な愛しかもっていなかったことが暴露された。」(VII, 196)と宣言する。アリストファネスも、「嫉妬心と復讐心の情念運動のために、高貴な愛に対する義務を忘れてしまったのです。」(VII, 197)と自らの非を認めた。刑務官イノは、7人の罪人たちに対して次のように判決を下す。「法はあなた方に対照的で同等の刑を要求します。あなた方はヒロインが欲した精神的関係をエゴイズムであると告発しました。したがってあなた方は、物質的關係における絶対的な献身を試練として甘んじて受け入れなければなりません。つまり、女子同性愛・擁護者 prosaphien の集団の補佐として、女子同性愛者の集団の絶対的な下僕として、彼女らの快樂と命令に奉仕しなければなりません」(VII, 197)。こうして恋愛法廷は大団円を向かえ、舞台は饗宴へと移っていく。

この寓話におけるテーマは、エゴイズムの乗り越えと、ファクマとイズムの中に生まれた「基軸的な愛」の生成である。エゴイズムや紛争を生むものは、つねに物質的なものである。「精神的ないし感傷的なものは、表面上は軽蔑されながらも現実には勝利してしまう物質的なものの、慎ましい奴隷にすぎない」(VII, 73)。この物質的なものの強さを、まず認めなければならない。「文明」の哲学者たちの間違いはこれを認めないことであり、その結果まったく「逆立ちした世界」を作り上げ、混乱を生み出しているのだ。「地位の上では第二位でしかないが、サルタンよりも力をもった大臣である物質的愛」(VII, 32)の力を認め、精神的な愛と組み合わせ、両者の均衡をはからなければならない。

ファクマが突きつけたダブル・バインドな要求は、いったんは「不和」を生み出すが、調和に至るための不可欠な契機である。パラドックスは集団の営みのなかでのみ乗り越えることができる。エゴイズムの対極にある「統一情念 unitéisme」は、集団において諸情念が集結する「贖罪」の儀式を通して現実化する。愛の飛躍の運動は、官能的な「単純な情念」から「複合的な情念」へ、膨大な情念の結集を実現する「崇高 sublime」な情念へと発展していく。シェレルが指摘するように、ここに生まれる崇高

な感情は、性的な欲望が脱性化される「昇華 sublimation」(フロイト)の結果ではない⁽¹¹⁾。それは、官能的な愛があくまで物質的なものを残しながら、感傷的な愛に結合されることによって実現する「複合された魅力 charme composé」なのである。

重要なのは情念を結集し、魅力を失った世界に再び魔法をかけること。シモーヌ・ドゥブーの表現を借りれば、「実在する幻想 illusion réelle」⁽¹²⁾を作り上げることである。「愛の陶酔のなかでこそ人は天へ昇ることができ、神の幸福を分かち合えると信ずる。愛以外のいかなる情念においても、幻想はかくも高貴で宗教的なことはなく、また感覚と魂の陶酔がかくも高まることはない」(VII, 15) のだから、新世界の実現は、この愛の飛躍にかかっているのである。

奇癖と調和

ところで、この錬金術的な過程において触媒の役割を果たしたのはイゾームであったが、おそらくフーリエ自身の分身である。「35歳のとき、たまたま私が一役演じたある出来事が、自分が女子同性愛・嗜好 saphiénisme という奇癖 manie をもっていることを気づかせてくれた。それは女子同性愛者への愛であり、彼女たちに味方するあらゆるものに対する熱意である」(VII, 389)。女子同性愛・擁護とは何か。先のイゾームの言葉に端的にあらわれている。「あなたの快楽を分かち合うことを要求することなく、それを自分のものとして享受する義務」—それは女性への絶対的献身であり、女性の快楽を高める一切のものへの「博愛」である。自らは官能的な欲望の主体であることを拒否し、女性たちの快楽の補佐役となることである。そもそも女子同性愛者の満足はファルスを必要としない。彼女たちは男性を必要としていないのだ⁽¹³⁾。性器的結合のみを求める「単純な情念」はまったく粗野なものであって、女性をファルスの欠如として位置づけるファルス中心主義の現れである。それに対して奇癖は洗練された性愛の形であり、ファルス中心主義を集団の営みのなかで脱構築する。同性愛者のような「中間的なものが、木組みの木釘と嵌め込みのように情念に

均衡をもたらす」(IV, 135)。「例外がなければ、われわれは政治においては専制に、快樂においては単調さに陥ってしまう」⁽¹⁴⁾。

奇癖は、地球全体に連帯を築くことさえできる。「もし大軍隊のなかで踵を搔くのを愛でる男と、その戯れを楽しむ女を出会わせれば愛踵という変異 variante を得ることができる」(VII, 335)。それは「無限に小さな *infiniment petit*」嗜好ではあるが、人々を旅立たせ、遠くの同胞と結びつけるには充分なのだ。したがって「調和」においては、「だれにも迷惑をかけることなく、多くの人間に快樂を味わわせるものは、つねに善であり、快樂を無限に多様化しなければならない調和は、この善をあてにしなければならない」(VII, 335)。嗜好の洗練とその多様性の発展を基礎に、「無限に大きな *infiniment grand*」結合が実現する。「踵搔き」や「髪摺み」といった奇癖は、「とるに足らないもの」であるが、「百姓にとって必要な堆肥のように」必要なものである⁽¹⁵⁾。それらは社会調和に欠かすことができず、基軸的な愛と同様な性格をもっているのだ (VII, 388)。

人間はそれぞれが特異な嗜好をもった存在である。そして神から与えられた12の基本情念の配合に従って、およそ810の性格に分類される。男女の違いを考慮に入れば、1620人になる。これがファランジュの構成員の数の意味である。様々な嗜好、性向、奇癖をもった人々が「系列」のなかに配置されるとき、個人を越える「情念運動」が生成し、ファランジュというオーケストラでシンフォニーを奏するのである。

調和とはまさに音楽的調和である。「文明」が、「情念の不愉快な騒音」で構成された「すさまじいシャリバリ」(VII, 9-10)であるのに対して、「調和」にあっては「諸情念は、音楽のコンサートのなかでの交替する演奏のように現れる。オーケストラはソロから総奏へ、そして総奏からソロへ、さらにデュオ、トリオ、カルテットといったパートの演奏が交錯する。……そこに声と楽器の演奏が様々に組み合わせられ次々に現れる。調和における情念の発展は、このようなものとなるだろう」(X, vol. II, 192)。

歓待のユートピア

ところで、ファクマとイゾームが取り結んだ愛の形態は、「天使結合」と呼ばれる。それは、「文明」の「排他的な愛」と対照をなす「基軸的な愛」である。フーリエはこのテーマに執着していた。別の変奏を聴くことにしよう。

ナルシスとプシケーはグニッドが誇る美男美女である。両者に恋する男女はそれぞれ20人を下らない。文明の法に従えばプシケーはただ一人の夫のものとなり、ナルシスもただ一人の妻をもつ以外に方法はない (VII, 43-44)。「文明のあらゆる哲学者が愛の運命について誤りを犯してきたのは、いつも一組の男女に限定された愛ばかりを当てにしてきたからである。そのため彼らはいつも同じ結末に至る。すなわちエゴイズムである。これこそは排他的なカップルに限定された愛の避けがたい効果なのだ」 (VII, 47)。

これに対して引力の見解は別である。引力は、ナルシスとプシケーが「博愛の精神」をもって、男女20人の求愛者に恩寵を与えることを望むのである (VII, 44)。他方、「天使カップル」の間には感傷的な愛の絆、すなわちセラドニーしか認めない。しかし献身的な天使たちの行為は単なる自己犠牲ではない。天使カップルに割り当てられた「超越的なセラドニー」は、一種の心的エロティズムであり、物質的欲望の彼方にまで二人を高めることを可能にする (VII, 92)。「すべては他人のために、私には彼らが私に与えようと望むものだけを」 (VII, 76)。これが「天使結合」の掟である。一組のカップルのもつ排他性は、こうして他者へと開かれ、エゴイズムは対極にある「統一情念」へと導かれる。

他者に対して開くこととは、歓待にはかならない。歓待することは調和人の生活様式である。さらに言えば存在論的倫理である。それは「文明」の「逆立ちした中心」である「自我 moi」を拒否し、自己を他者に対して開くことである。調和人は他者との交感のなかに自己を見出す。自己の特異性が要求するままに、他のファランジュへと旅立つ。調和人はこういっ

た冒険に満ちた生活のなかで、複数形で語られる彷徨する主観性を獲得するに至る。シェレールの言葉を借りれば、「主観性なるものはまずもって自我の外に散在している。意識は存在の中での、つかの間の出来事である」。近代哲学の間違いは、「この主観性の生成の過程を、自我、考える我に一致する主体とその実体に封じ込めたことである」⁽¹⁶⁾。フーリエの個人を超越する「情念運動」とは、この主観性の生成の過程のことではないだろうか。情念の調和のためには、個人は自分の殻を破って他者の方へ向かわなければならない。

シェレールは、1973年に上梓した著書『ハイデッガー』のなかで、ハイデッガーの歓待の概念である Halt を次のように説明していた。「Halt は制止することと同時に支持すること、あるいは保護することを意味する。彷徨を免れること、すなわち住むこと、それは人間の真理を求めて、どこに、どのように滞在するかを見つけることである。その真理とは、あらかじめ定義された人間に関わるのではなく、人間とは何であるかを言うのに役立つような真理である。住むこととはなにかを理解することによって、まさに定義されうるような真理である」⁽¹⁷⁾。

フーリエの世界では、相矛盾すると思われる「住むこと」と「彷徨すること」が新しい融合をみる。歓待としての「他者への開き」こそが、嫉妬心や排他的な愛で特徴づけられる「文明」の裏に隠された「愛の新世界」を到来させるだろう。それはけっして実現不可能な「ユートピア」ではない。各人が情念の声に耳を傾けさえすればよいのだから。

注

フーリエの著作は全集 *OEuvres complètes de Charles Fourier*, Édition Anthropos, 1966-1968, 12vol. に依拠し、引用ならびに参照頁は、まず巻数を表記しその後に頁数を記した。なお第一巻にあたる *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales* に関しては、1808年の初版本にもとづいた巖谷國士氏の全訳『四運動の理論』（現代思想社、1970年）の二巻本があるので、原文頁の後に上、下、と巻数を表記した後に頁数を記した。

- (1) Immanuel Kant, “Die Metaphysik der Sitten”, *Immanuel Kants Werke*, Band 7, Suhrkamp, 1922, S. 81-82. 吉澤傳三郎訳「人倫の形而上学」(理想社, 『カント全集』, 第11巻, 1975年), 122-123頁。
- (2) G. W. F. Hegel, “Grundlinien der Philosophie des Rechts”, *G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden*, Band 7, Suhrkamp, 1970, S. 320. 藤野渉・赤澤正敏訳「法の哲学」(中央公論社, 世界の名著35『ヘーゲル』, 1967年), 397頁。
- (3) フーリエによれば人間は生来, 次にあげる12の基本情念をもっている。それは大きく三つのカテゴリーに分類される。第一基本情念は五感の満足を求める感覚的情念である。「味覚」, 「触覚」, 「視覚」, 「聴覚」, 「嗅覚」がこれにあたる。第二基本情念は集団を求める欲求で, 感情的な情念である。「友情」, 「野心」, 「愛」, 「家族愛」の四つである。第三基本情念は, 第一基本情念と第二基本情念を噛み合わせて社会関係を編成する重要な役割をもち, 機構的情念とも呼ばれる。それは「移り気 papillonne」, 「複合 composite」, 「密謀 cabaliste」の三つである。「移り気」は変化を求める欲求であり, 「複合」は感覚的情念と感情的情念を組み合わせる働きをもち, 「密謀」は嗜好の洗練をめぐって各人を競争へと導く情念である。これらの機構的情念が十全に働くときに, 社会調和がもたらされる。そのとき初めて姿を現す13番目の情念が「統一情念 unitéisme」である。本稿には, 次の四つの情念がとくに関連がある。恋愛の情熱である「愛」, 人々を彷徨へと導く「移り気」, 感覚と感情を結びつける「複合」, そして「統一情念」である。
- (4) この論点に関しては, 拙稿「フーリエの『魅力的労働』論」(『現代思想』, 青土社, 1990年4月号) 参照。
- (5) René Schérer, *Utopies Nomades*, Nouvelles Éditions Séguir, 1996, p. 116. 杉村昌昭訳『ノマドのユートピア』(松籟社, 1988年), 103頁。
- (6) Gilles Deleuze, 《L'immanence: une vie ...》, *Philosophie*, numéro 47, sept., 1995, p. 6. 小沢秋広訳「内在: ひとつの生……」(『文藝』, 1996年春号), 134頁。
- (7) この論点に関しては, 拙稿「ファランジュの建設, あるいはドメスティックな改革」(野地洋行編『近代思想のアンビバレンス』御茶の水書房, 1997年) 参照。
- (8) René Schérer, *Utopies Nomades*, p. 68. 前掲訳書, 62頁。
- (9) Jacques Derrida et Anne Dufourmantelle, *De l'hospitalité*, Calmann-Lévy, 1997. 廣瀬浩司訳『歓待について, パリのゼミナールの記録』(産業図書, 1999年) 参照。
- (10) René Schérer, *Zeus Hospitalier, Éloge de l'hospitalité*, Armand Colin,

1993, ch. V. 安川慶治訳『歓待のユートピア, 歓待神礼賛』(現代企画室, 1996年), 5章, および, Jacques Derrida et Anne Dufourmantelle, *op. cit.*, 前掲訳書, 参照。

- (11) René Schérer, *Pari sur l'impossible*, Presses Universitaires de Vincennes, 1989, pp. 78-79.
- (12) Simone Debout, *L'utopie de Charles Fourier*, Payot, 1978, p. 97. 今村仁司監訳『フーリエのユートピア』(平凡社, 1993年), 117頁。
- (13) *Ibid*, pp. 113-114. 同上書, 139-140頁。
- (14) Feuillet manuscrit isolé de Charles Fourier cité par Simone Debout, in Charles Fourier, *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales*, J.-J. Pauvert, 1967, p. 247.
- (15) *Ibid*, p. 247.
- (16) René Schérer, *Regards sur Deleuze*, Éditions Kimé, 1998, pp. 99-100.
- (17) René Schérer et Arion Lothar Kelkel, *Heidegger*, Éditions Seghers, 1973, p. 22.